

2025 年度（令和 7 年度）常磐大学高等学校 自己評価表

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国語科	自国の文化への興味・関心を持たせる	・資料や映像を用いて視覚的に興味を持たせ、古文への無関心を改善し、苦手意識をなくすための授業内容の充実化を図る	B		<p>・古典学習への苦手をなくしていきたい。本校の共通テストの分野別平均点を見ても、古典領域は低い。興味を持たせ、苦手をなくし、得意にするアプローチが必要である。まずは興味を持たせるためのアプローチを心がけたい。</p> <p>・読書に対する意識も高めたい。本年度は1年生で読書感想文を表現課題で採用するなど力を入れたが、まだ生徒の読書への意欲は低い。次年度は図書委員と協力するなどさまざまな企画をしたい。</p> <p>・データの読み取りがまだ上手いれない。そもそも共通テストの問題も安定していない。次年度で3年目になるのである程度傾向もつかみ、対策を行いたい。</p>
	知識・技能の定着	・読解法や解答法を段階的に示し、自分がどのように読んだり考えたりしたのかをチェックし、ペアで相互に説明させることで、技能の定着を図る。	A	A	
	読書への興味関心および思考力・表現力の育成	・教材に関連する本を紹介し、発展学習に繋がられるようにアドバイスをする。	B	B	
		・小論文などの指導において、読書を通して得た知識を基に自らの考えを確立し、相対する意見を踏まえながら論述する手法を習得させる。	B		
	自らの学習を調整しながら粘り強く学びに向かう態度の養成	・ロイロノートを活用して授業の復習をしたり、スタディサプリの授業動画で授業の補強を行ったりさせることで自主的に学習する力を養う。	A	A	
		・定期的に振り返りを行い、学習を通して培った読解力がどのような段階に達しているかを自己分析し、目標を明確にして読解に取り組ませる。	B		
データ読み取り能力の育成	・実用文読解に向けて授業でデータに触れ、データ読解力を養う。また、他教科と連携を図り、データに対する苦手をなくす。	C			
地歴 公民科	基礎学力の定着と理解の深化	・学習活動計画・振り返りシートの作成を通し、生徒自らが学びを調整し、個別最適な学びを支える学習環境を整備する。	B	B	<p>・定期考査の正答率は分析できたが、その結果を授業に活用することはできなかった。分析結果をもとに、授業改善方法について、協働で議論を進める。</p> <p>・現代社会の諸課題に目を向け、それに対する課題意識を持った生徒は増えているが、主体的に課題を発見し、解決しようとする思考の段階には至っていない。生徒が自ら問いを立てる力を育むため、成功したクラスの取り組みを教員間で共有し、問いを立てるフレームワークを作成する。</p>
		・定期考査において分野ごとの正答率を分析し、教員の授業改善につなげる。	C		
	社会に対する興味関心の向上	・生徒自らが授業の内容と現代社会の諸課題を結びつけ、主体的に学習に取り組める授業を展開する。	C	B	
		・ICT教材（ロイロノートなど）を活用し、生徒が共に学び合い、社会現象を多角的に捉える授業を展開する。	B		
	豊かな思考力・判断力・表現力の養成	・生徒自らが問いを立て、探究するプロセスを中心に据えた学習者中心の授業を展開する。	C	B	
・対話を軸とした授業を通して、生徒が論理的に考え、自らの意見を表現する機会を提供する。		B			

	具体的目標	具体的方策	評価	次年度（学期）への主な課題
数学科	教員の授業力の向上	・長期休業中等に、教科内で教科指導研究会を定期的実施し、教員間の授業スキルの向上を目指す。各研修や研究会への参加と内容の共有。	B	教員間の授業スキル向上に関しては、教員間が密なコミュニケーションをとることができていた。研修会への参加も前年度より増加したが、教科内まで波及させることが課題である。授業計画に関しては、担当者の多くがICTを活用した授業展開に取り組んでいる。生徒の活動が活発になるような働きかけや工夫を数学科内で検討していきたい。数学検定は受験にもあまり活用されないので位置づけが難しいところであるが、一定数の受検者がいるので、今後も継続していきたい。
	基礎・基本の定着 学習指導の強化	・計画的に授業準備を行い、家庭学習の充実を図るとともに基礎・基本の定着を目指す。 ・知識の定着を計り、協働的な学びの実践を行う。	C	
	主体的な学習による 思考力・判断力・表現 力の養成	・授業内での主体的な学びから生まれる質問や対話によって、理解力の向上と数学的な論理力を養う。対話を軸とした授業の実践と教科内での検討を行う。	B	
	数学検定の利用による 基礎知識の到達度 確認	・数学検定を利用して、自己の基礎力の定着を確認する。	B	
理科	生徒の実態に応じた 指導と理解の質の向 上	・定期的に小テストや課題を行うことで生徒の実態を把握し、基本的な知識の習得の徹底を図る。	B	小テストや課題を通じた基礎知識の定着は進んでいるが、それらを活用する実践的な場が不足している。実験や観察活動をさらに充実させ、学んだ知識がどのように活用できるかを実感する機会を増やしていきたい。外部コンテストや研究発表活動への参加は一部の生徒に偏っているので、情報を定期的に紹介し、参加の意義やメリットを強調していきたい。また、準備や指導を行うためのサポートチームを結成し、個別に相談やアドバイスを受けられる環境をより整えていきたい。
		・学んだ知識を活用して、図表などから必要な情報を読み取り活用する力を身につけさせる。	C	
	自然科学に関する興 味関心の向上	・自然事象に関心をもち、そこから課題を見いだせるような各種指導・企画を展開し、積極的に参加の呼びかけをする。	C	
		・教科書の内容と身の回りの事物や現象を結びつけさせるような指導の工夫を行い、自ら探求する力を身につけさせる。	B	
豊かな思考力・判断 力・表現力の養成	・観察や実験を行い、結果を整理・分析した上で、考察し、発信する力を養う。	B		

	具体的目標	具体的方策	評価	次年度（学期）への主な課題
保健 体育科	個人や集団の実態に応じた授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度から引き続き、生徒の実態に応じた授業を展開するために、使用する用具の工夫、ゲーム中のルール変更を柔軟に行う。 	B	<p>ここ数年課題としてきた授業展開に関しては、年々アップデートを重ねてきたことで少しずつ良いものとなってきた。授業内容のみならず、実技テストの内容や実施方法、評価方法についても引き続き見直しながら実施していく必要はある。</p> <p>生涯スポーツのヨガについて、昨年度より実施生徒を集める事ができなかった。昨年度より早めに動き出し、生徒たちの意向を確認していたがなかなか上手くいかなかった。次年度は、早めに動き出すと共に、授業時に少しずつ生涯スポーツの内容に触れながら、考えるきっかけを与えながら進める必要がありそうである。</p>
	生涯にわたって運動に親しむ態度の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・保健指導、体育実技指導の両面から生徒の健康にアプローチしていく。 ・「生涯スポーツ」の検討。体を動かすことの楽しさや、生涯にわたって運動に親しむ態度を身につけるための種目を変更し、ニーズにあった選択肢を設けながら授業を実施していく。 	C	
芸術科	指導計画の改善・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・各科目の特質に合わせて、生徒が感性を働かせて生活や社会のなかで芸術の価値を見だし、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育てる 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に即した指導計画や授業進度を心がける。 ・地域の展覧会や演奏会に足を運び、授業で育んだ感性を生活や社会で活かす機会を作るようにしたい。 ・特に創作分野で ICT 機器の活用を充実させ、協働的な学びを深める。
	生徒の個性を重視した指導方法の工夫改善	<ul style="list-style-type: none"> ・表現及び鑑賞の活動において、タブレット端末や電子黒板等の ICT 機器や画像・映像教材を効果的に活用する ・表現と鑑賞との関連を図りながら、探究的な学習を通じて協働的な学びを充実させる 	A	
	指導に生かす観点別評価の更なる工夫改善	<ul style="list-style-type: none"> ・指導と評価の一体化による授業改善を行い、生徒が学習したことの意義や価値を実感することにより、生徒の学習意欲が向上するよう努める ・評価規準をより具体的に明確に設定し、生徒のよい点や進歩の状況を積極的に評価する 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・科目の特性を考慮に入れた評価規準の設定を進め、生徒のよい点を積極的に評価することにより、学習意欲の向上につなげたい。

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
家庭科	生活に必要な基本的知識・技能の習得および生徒が主体的に取り組むことができる授業と適切な教材の提供	・生徒が主体的に取り組むことができる実践的な授業を展開し、適切な教材を提供する。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> 各単元の終了時に自己評価を兼ねた振り返りシートを取り入れたことで、学習内容の理解と実生活での実践への意欲につながっている生徒が増えた。 生徒の達成度に応じた細やかな指導が理想だが難しく、さらに方法を工夫していきたい。 昨年度よりも多くの実習を取り入れたが、次年度もさらに多くの体験的な学習やICTを活用した学習が楽しくできるよう工夫を重ねたい。
		・生徒一人一人の進度や達成状況に応じた指導を行う。	B		
・ICTの効果的な利用方法を研究し、生徒が楽しみながら学習できるよう授業の改善を図る。		B			
	生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実・向上を図る能力と実践的態度の育成	・学習したことを生かし、自らの生活課題を主体的に解決することができるよう、対話的な活動や実習、振り返りを積極的に行い、実践的な態度を育成する。	A		
英語科	基礎学力の向上と定着	・「ときわ力」を育む授業を通し、シラバス英語科概要（ロイロノート資料箱学内共有に保管）に示されている各学年の4技能の基礎力の定着を図る。	B	C	<ul style="list-style-type: none"> 授業はシラバスを意識して実施され、定期考査における振り返りシートは一定の効果を挙げた。具体的な学習法や学習計画の立て方について指導は行われたが、継続的には学力向上に結びついていない。音読活動やスピーキング活動が文法の運用力と読解速度には貢献したものの、語彙力の向上には不十分だった。授業での英語使用を増やし、振り返りシートの項目を明確にすることで、学習意欲の向上を促す必要がある。 スタディサプリの教材を活用し、英検への自信を授業内で育んだ。BLENDを用いた保護者への通知を徹底した。英検2級及び準1級では合格者を輩出し、校外で自主的に受験する生徒も増えた。今後は、個々の生徒の必要性に応じ、大学受験における英検の活用など、英検の利点を具体的に伝えていくことが重要である。
		・効果的な振り返りシートを用いて、生徒それぞれが自学方法の質を向上させながら学習に取り組めるよう促す。	C		
	英語運用力の向上	・コミュニケーションの授業を中心に、音読活動等を通して読解速度を上げるとともに、語彙力も高める。	B	C	
		・表現の授業を中心に、基本となる文構造・文法事項を用いて英作文等を重ね、ペアワーク、プレゼンテーション活動等で実際に運用する。	C		
	自分の考え・感想を英語で表現する活動の充実	・ICT機器を効果的に使用しながら、英語運用力向上のための活動で得た知識を活用し、自分自身の考えを述べる機会を設ける。	B	B	
		・ハリーエインリー高校とのオンライン英会話、DMMオンライン英会話等を通して、実際に日本人以外の人とのコミュニケーションで英語を活用しながら、互いの考えをやり取りすることに慣れ親しむ。	B		
英語検定等、資格試験チャレンジの奨励	・学習を通して培った英語力がどのようなレベルに達しているか自己分析と他者へのアピールの材料の1つとして、検定のアナウンスと受検のための後押しを行う。	B			

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
情報科	コンピュータや情報ネットワークを活用する知識や技能の習得	・アルゴリズムを表現する手段、プログラミングによってコンピュータや情報通信ネットワークの機能を使う方法や技能を身に付けさせる。	B	B	プログラミングなどの実習を多く取り入れた授業を展開していきたい。生徒にしっかりと考えさせながら授業を進め、論理的思考力の育成に尽力したい。また、PCスキルに大きな差があるため、苦手な生徒や欠席した生徒へのフォロー体制を充実させたい。 共通テストのプログラミング、データ分析の受験対策を充実させたい。
		・コンピュータやネットワークを活用して、情報を適切に収集・処理・発信する基礎的な技術と技能を習得させる。	A		
	情報を正しく扱うためのマナーやルールの理解および主体的に活用する態度の育成	・研究レポートの作成を通して、情報を収集し、必要な情報を利用する力を育成する。また、画像の利用を通して、著作権やマナーを理解させる。	A	A	
		・発表体験を通して、自分の考えをまとめ、主体的に相手に伝える力を育成する。また、グループワークを通して他の意見との比較をさせる。	A		

	具体的目標	具体的方策	評価	次年度（学期）への主な課題	
教務部	教務システム・模試の効果的な利用	・BLENDの学習時間と学習習熟度・出欠状況を分析し、効果的な声かけ・面談のきっかけとする。スタディサプリの反転授業やゼミを実施し効果を検証する。ロイロノートで対話や参加型授業実践を推進する。	B	模試の分析について、今年度は特進選抜コースの担任の力も借りたが、教務部内ですべて行うべきであるというご意見もあり、学年との連携をどのようにしていくべきか迷いがある。構成メンバーを選べるわけではないので、特進選抜コースの担任が極端に少ない場合もある。進路部に学年副主任が配属されるように、教務部には、各学年の特進選抜コース担任を1名ずつ配属していただきたい。スタディサプリについては、今年度議論が間に合わなかったため、再度実施プランを練り直し、到達度テストも含めて議論をしていきたい。ゼミについても放課後メンターの導入と合わせて新たにテーマ設定をしたゼミを計画したい。土曜日講座を意識したプレ企画を呼びかける時期でもあり、実現に向けた予算計画も必要である。今年度は、非常勤講師の提出書類変更や定期考査の手順の整理や変更・指導要録・教務内規・細則の整理・情報セキュリティ対策に時間がかかってしまったので、来年度は学びの方向性や授業力向上について、実践的な研修や話し合いをしていきたいと考えている。具体的な委員会についても話し合いをしていきたい。	
	生徒のやる気と全教員の指導力向上	・学習合宿で課題解決型のチーム学習と企画し、学年を越えた学びをサポートする。	C		C
		・観点別評価について他教科の実践を発表し、バランスの取れた評価・課題・定期考査のあり方を考える。	C		
		・読書ノートや授業・ゼミの振り返りシート・生徒の部活動・検定取得の実績報告を通して、生徒の主体的な学びの力を引き出し、生徒の学校生活のモチベーションをアップさせる。	B		
	著作権・情報セキュリティの意識強化	・著作権の侵害や情報セキュリティに対するコンプライアンスへの理解を深める研修を実施する。	A		
指導要録の表記・文章表現の整理	・学籍に関する記録や指導要録の表記を統一し、かつ、本校の生徒実態に合わせた根拠のある文章表現について研修していく。	A			
生徒支援部	水戸で一番制服をきちんと着る学校	・定期的な駅、学校周辺の巡回を実施する。	A	・服装指導や校内環境の整備、いじめ防止の取組については、引き続き維持および充実を図る。 ・いじめ防止の取組として、生徒の友人間のトラブルを未然防止・早期対応できるよう、教職員間およびSCとの連携体制を一層強化していく。	
		・全職員をあげての朝の服装指導、テスト期間の校外巡回を行う。	B		
	安心安全な校内環境の維持	・生活アンケート実施、アンケート結果から面談を実施する。	A		
	生徒会との連携維持	・校則サミット、生徒会との意見交換会を実施する。	A		
いじめ防止と迅速な対応	・いじめ防止対策会議を通して生徒の変化やサインを見逃さないよう対応する。 ・生活アンケート結果を学校全体で共有して対応する。	A			

生徒が心身ともに健康な状態で学校生活を送る支援の充実	・保健室経営計画に基づき、適切な保健室経営を行う。	B	B	<p>・生徒が心身共に健康な学校生活を送れるよう、各種健康診断を学校行事として計画通り実施する他、学年や保護者、SCと協力して教育相談の適切な運用をする等、教育活動全体を通して取り組めることを目指す。</p> <p>・生徒のコミュニケーション能力の育成を目指し、エンカウンターやアサーショントレーニングの内容をさらに工夫する。</p>	
	・日頃から健康相談等がしやすい環境づくりに努め、担任や学年、教科担当者、管理職、保護者やSCと連携を密に図る。	A			
	・各健康診断を学校医・学校歯科医、委託検診機関と連携しながら適切に実施し、生徒の健康状態を把握する。結果に応じて、異常や疾病の疑いのある生徒には、できる限り速やかに受診勧奨を行うなど、生徒の健康の保持増進に寄与する。	A			
	・保健日より・相談室日より、掲示物を作成し、生徒のヘルスリテラシーの定着を目指すとともに、心身の健康管理ができる力の醸成を図る。	B			
教育相談活動の充足	・週2回のSCとのカウンセリングを適切に調整・実施し、切れ目のない支援に繋げる。	A	A		
	・生徒のコミュニケーションスキルの一助となるよう、担任を中心としたグループエンカウンター（1年生）や、アサーショントレーニング（2年生）等を企画・実施する。	B			
適切な学習環境整備	・学校薬剤師による環境衛生検査を適切に実施し、不十分な点があれば全教職員で共通理解し、改善するよう努める。	B	B		
入試 広報部	各種発行物を通じた学校理解の促進	・パンフレット、チラシ制作の時期と内容をより効果的にすることで、中学生・保護者の本校に対するより具体的な理解を深める。	B	A	<p>校内作成のチラシをオープンスクールや私学フェアで配付することで、受験生にとってタイムリーな情報を提供できた。</p> <p>Instagramはフォロワー数が2000名超に増えた。H.P.をリニューアルし、閲覧しやすくなった。記事を各々が更新できるようにしたが、まだ機能はしていない。</p> <p>O.S.では体験授業の充実を検討してきた。中学生にとっての本校の魅力は「雰囲気」のため、体験授業に尽力を注ぐ必要はないのかもしれない。</p> <p>他の分掌の負担が多く、入試広報業務に手が回らないスタッフが多かった。全体バランスもあるが、入試広報に関する比重を重くできる人員がいなくともうまく回らない。</p>
		・旬な情報を発信できるH.P.やSNSを有効的に活用し、より多くの情報を可視化し、生徒募集に結びつける。	A		
	学校見学会および説明会の充実	<p>・オープンスクールと秋季学校説明会のそれぞれの位置づけに合わせた内容の充実をはかり、時期に応じた情報の提供をはかる。</p> <p>・上記2つ以外のイベント（中2対象説明会、合格者対象説明会、進学相談会など）を活用し、広報対象を広げる。</p>	A	B	
教員の円滑な連携と組織的な広報活動の推進	・打合せの機会を増やすことで入試広報部内の明確な業務分担を共有し、円滑な活動を目指す。	C	C		
	・入試広報部員全員の共通理解のもと個別の業務を進め、組織として生徒募集活動に携わる。	C			

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
総務部	儀式的行事やその他学校行事の円滑な企画運営	・行事に関して前年度からの反省や課題を引き継ぎ、適正かつ円滑な運営を図る。また、各分掌との情報交換を密に取りながら適切な年間行事計画を立てる。	B	B	昨年度の反省を活かし、今年度の行事運営を行うことができた。しかしながら、今年度の運営においても、次年度に向けての反省はあるため、より良い形を求めて行かなければならない。特別授業等に関して、外部からの評価はいただいているものの、内部では不満の声もあるため、こちらに関してもより良い形を求めていこうと思う。
		・総務部としての業務を明確化した上で、他の分掌との連携を密に行い、共通理解を深める。	B		
	安心、安全な学校づくり	・毎年実施している防災訓練を、より実践的な内容のものに変えるとともに、校舎の危険箇所や破損箇所の点検を確実に行う。	A		
	入学準備プログラムの充実	・特別授業、入学予定者説明会を通して、常磐の学びや教育方針を理解してもらうとともに、入学後の不安解消に繋げる。	A		
進路部	多様なキャリアビジョンの啓発	・生徒・保護者に向けた活発な情報発信に務める。 (共通テスト出願情報・前年度入試実績など)	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 希望制の進路ツアーや外部講師による講話は生徒の視野を広げるものが多くあった。次年度に向けては、毎月異なるプログラムを実施できるよう計画するなど機会を多く与えたい。 海外大学進学希望者に向け、説明会や体験会等を継続的に開催し、進路選択の一助にしたい。 3学年の国公立大学出願検討は、濃密に行うことは出来たが、年内入試の拡大に伴う一般入試の受験指導の方略はいくつかのモデルケースを創出し共有していきたい。また、教務部の定期考査・模擬試験分析との連動が次年度の課題である。 法人内との連携について、不定期ではあるが実施回数は増えてきている。次年度は説明会や体験授業を高校・大学で実施するための定期的な会議を実施していく。
		・進学後の人生設計の視座を持った指導を行う。 (キャリアガイダンスや大学見学・企業見学等)	A		
		・多様な価値観に基づいた進路情報の提供や企画を推進する。 (特に海外の学校進学を希望する生徒向けの講演会等の実施)	A		
	進路実現に関する支援体制の推進	・模擬試験・定期考査の分析と生徒の活動歴をもとに各々にあった入試方式を検討する「進路検討会」を行う。	C	B	
		・進路部、教務部（学習指導部門）、学年教員や教科担当者と協同して、生徒のキャリア実現に向けた支援体制を整える。	B		
学校法人内での教育連携の活性化	・常磐大学／常磐短期大学等と連携し、生徒のキャリア学習に資する体験授業・説明会等を拡充する。	B			

	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への課題
特別活動部	学校行事の充実	・ときわ祭において、生徒の自主的な行事運営を重んじ、教員は側面から支援する。	B	B	委員会活動の活性化に一定の難がある。生徒自らが各所属先において活性化に向けた議論をし、実際に行動に移せることが望ましいが、それをサポートすることができるだけの見通しをもった指導体制の構築が不十分であった。改善したい。一方で生徒会活動の活性化には一定の成果が得られたように思う。月並みの仕事だけではなく、生徒および教員からの要望に答えるべく奔走する姿が頼もしさを帯びてきた。組織的にも生徒会の躍動を次年度の委員会活動に繋げていきたい。
		・クラスマッチを通して運動に親しむ態度を育み、クラスの団結力を高める。	B		
	生徒会活動の活性化	・生徒評議会を定期的開催し、その内容を充実させる。	B	B	
		・全校行事であるときわ祭やクラスマッチ準備に関わることで、生徒会活動と各種行事を接続し、活動の一部を可視化できるようにする。	B		
	委員会の活性化	・委員会便りを発行し、委員会からの情報を発信する。	D	D	
		・委員長会議を充実させ、改善案を話し合う機会を設ける。	D		
	部活動の充実	・生徒の主体性を育てる部活動になるよう支援する。	B	B	
		・学業との両立を可能にする体制づくりに努める。	B		
研究開発部	探究プログラムの進化と精選、評価指数の検討、教育機関や地域との連携	・地方行政や企業と連携した課題解決型学習に取り組むことや、地域ボランティアなど、生徒の資質を向上できるようなプログラムの開発や運営を行う。	B	C	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携によって生徒の資質が向上できているか疑問が残るため、アセスメントを利用して客観視していく ・SNSでの発信が途絶えてしまっている。次年度は発信を継続することと、個人課題研究以外の発信も増やしていきたい ・海外研修に参加する生徒が減少傾向にあるので、参加人数が増えるように、費用やプログラム内容、プロモーションの仕方を今後も継続して検討していきたい ・インバウンド留学生の対応方法について職員研修の機会などを設けることで、留学生を活かした国際教育について考え、本校の国際教育のレベルを1段階上げていきたい ・図書館の環境を整えつつあるが、図書館や電子図書館の利用促進の取り組みが弱かった。次年度は図書便りに電子図書館のコーナーも追加して、発信していきたい ・探究での図書館利用は定着してきたが、専門書や新書を使う取り組みがあまりできていないため、来年度の授業内容を検討する。
		・学校全体で育成する資質・能力である「ときわ力」を踏まえたルーブリックやアセスメントを活用し、本校の課題を検証し、ときわ力の向上を目指した授業プログラムを開発する。	C		
		・SNS等を利用して学校外への発信を増やし、本校教員の探究への理解を向上させることや、他校や外部機関とのつながりをつくる。	C		
	国際的視野をもった生徒の育成と留学支援	・SDGs活動や探究活動を通して、日本や諸外国の文化に対する理解を深める教育プログラムを開発し、実行する。	B	B	
		・本校生や受け入れた留学生に向けた、研修の実施や相談室の設置を通して、留学へのサポートを強化し、留学経験者数の増加を目指す。	B		
	書籍を媒体とした知の育成と図書館利用の促進	・教職員や生徒の要望を調査し、教職員や生徒の図書館の利用頻度や電子書籍を含めた書籍の貸出数を増進させる。	B	C	
・総合的な探究の時間で、専門書や新書などを活用する授業プログラムを展開し、生徒の情報モラルや情報リテラシーを育成する。		C			

	具体的目標	具体的方策	評価	次年度（学期）への主な課題
1 学年	学びの基盤を築く	・ 高校生活のスタートとして、学びの態度や姿勢を定着させることを重視する。勉強の方法や学習計画を立てるスキルを身につけ、学ぶことの意味を日々の学習を通じて考える習慣を作る。	B	<p>・ 日々の学校生活についての満足度は高いが、一方で、その状況に満足してしまい、今後は興味関心を外へ向ける意識が必要であると思われる。そのためにも、「なぜそうなのか」「どうすればいいのか」を常に自ら意識するよう促し、今自分のなすべきことについて考える機会をもつようにしていく。さらに、自分の考えを他者との対話を通して深める機会をさらに増やしていくことも検討する必要がある。</p> <p>・ 服装・マナーについては、その大切さを繰り返し生徒に向けて発信してきた。また、他者との関わりの中で、基本的なマナーが円滑な人間関係を築くために必要であることも、機会を設けて触れてきた。これらの点についてはおおむね達成できていると思われる。</p> <p>一方で、セルフマネージメント能力の育成に関しては、未だ他者に頼る傾向が見られ、今後も継続してその大切さに気づいてもらうために、機会を設けて触れていきたい。</p>
	自己理解を深める	・ 自己分析やプレゼンテーションを通して、自分の興味や得意分野について理解を深めさせる。自己理解は自己肯定感の基盤となり、自信を持って行動する力を育てることになる。	B	
	新しいことへの挑戦を奨励する	・ 新しい環境での部活動や校外活動、検定に参加することを奨励し、未知の領域に挑戦する経験を通じて自己肯定感を高める。失敗しても学びがあることを理解させ、前向きな姿勢を養う。	B	
	コミュニケーション力を強化する	・ 対話する機会を設け、他者とのコミュニケーションを円滑に行う力を育成する。互いの意見を尊重し、協力して課題を解決する経験を積むことを目標とする。	B	
	基本的な社会参加の経験をつむ	・ 校内や地域の活動に積極的に参加することで、社会の一員としての意識を芽生えさせる。例えば、地域のボランティア活動や学校行事の運営などを通じて社会参加の第一歩を体験させる。	B	
	服装・マナー意識の醸成する	・ 生徒に、校則で定められた服装やルールについて再確認させ、セルフプレゼンテーションの視点も踏まえて、なぜ服装・マナーの意識の醸成が重要かを考えさせ、理解させる。	A	
	基本的マナーの習得を目指す	・ 挨拶や礼儀作法といった基本的なマナーを日常生活の中で意識するよう指導する。これには、友人や教員とのやり取りの中で実践する場面があることを意識させる。	A	
2 学年	ときわ力の浸透と実践	・ 協働力を特に養う。 生徒一人一人が目的を持って高校生活を送るように活動を行う。その上で、他者の目的等にも触れ、他者の価値観を理解する機会を持ち、共に目的に向かって協力しあう態度を醸成する。 またときわ祭、クラスマッチ、修学旅行等の行事に向けた活動を通して、他者と協働して行事を作り上げていく姿勢を重視する。	A	<p>「ときわ力を磨き、考え挑み続け、社会に貢献できる人を育てる。」という学年理念のもと、集大成となる最終学年では、”ともに生きる力”では『統率力を特に養う』、”切り拓く力”では『創造力、表現力のさらなる向上』、”ワクワクする力”では『粘り強く取り組む』ことに力を注ぐことを次年度目標とする見通しである。</p>
		・ 創造力を高め、表現力を養う。 自分の行動を振り返る機会を活かして、発見した課題の解決策を検討し、自分自身の言葉で表現し、人にわかりやすく伝えることを通して、表現力を磨く。	B	

		<ul style="list-style-type: none"> 自己分析を自分の成長に活かす。自分の行動を振り返る機会を活かして、常に自分の高校生活の質を高めることに意識を持たせる。 	A		<p>生徒一人ひとりの目標実現に向けて、いち早く学習に本気になることを推し進めていく必要があるが、ここまで学習習慣の定着にはかなりの課題を残している。エンジンがかかり始めた生徒の支援を進めながら、スタートが遅い生徒が路頭に迷うことのないよう、進路部とタッグを組み、学年全体で担任のバックアップを行っていく体制を強化する必要があると考える。</p> <p>また、これまで振り返りに力を入れてきたが、心に響いていない場合があるように感じられる。心に響かないと本気は引き出せないなので、過去のマイナスをプラスに変える手立てを考えさせるより、どれほど自分の未来を強くイメージし追い求めるかを考えさせる仕掛けに力を入れていくべきなのではと感じている。</p>
基礎的な学力を土台に、応用的な知識・技能の向上に向けた学習への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 学習の基本は授業であるという点を再認識し、生徒自身が学力向上を目的とした授業の準備、内容の理解、知識定着のための復習に取り組めるように促す。 	A	B		
	<ul style="list-style-type: none"> 検定への挑戦を奨励し、自分の知識・技能の定着度合いを学校の成績以外からも客観視できる機会を意識させる。 模試の結果から学習面の自己分析を行うことを定着させる。 	B			
生徒の達成目標と自己実現に向けた進路研究の充実	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が高校生活における長期目標と短期目標をさらに検討し、振り返りを繰り返しながらその変遷がたどれるよう、記録を継続する。振り返りを通して課題や次の目標設定がより充実したものとなる機会にする。 	B	A		
	<ul style="list-style-type: none"> キャリアガイダンスやオープンキャンパスへの参加を通してより充実した進路研究を行えるようにする。 	A			
3 学年	考え、挑み、学び続ける態度の育成	<ul style="list-style-type: none"> 2年間で培った、学びの姿勢を継続し、自ら学び、進路決定後もその姿勢を継続させる態度をつくる。 	A	A	
		<ul style="list-style-type: none"> スタディールームの利用促進。毎日の学習時間の入力などを通して学びを可視化する。資格取得にも積極的に取り組む。 	A		
	最適な進路の実現	<ul style="list-style-type: none"> 担任面談にとどまらない、学年（学校）をあげての進路指導。また、自ら考え、進路を決定しようとする態度を尊重する指導。 	A	A	
		<ul style="list-style-type: none"> ロードマップを活用した適切な指導。キャリアナビ (AI) を活用した指導の充実。 	B		
最高学年としての常磐大学高等学校生の育成	<ul style="list-style-type: none"> 様々な行事や部活動において、最高学年としての役割を認識し、後輩達と共に充実した学校生活を送る。 より良い最高学年の生徒の姿とはどのような姿なのかを日々問い続ける。 		A		

判定規準 A:大変よくできた B:よくできた C:ふつう D:やや不十分 E:不十分